

あとがき

本書の出版は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで開催された『うたひ鏡』を講読する研究会に基づく。六年に亘る研究会の歩みを綴り、あとがきとしたい。

研究会が始まったのは、二〇一九年の冬だった。

部会の報告

能楽伝書を読んでいます。関西居住の方々を中心に、音曲伝書本文の指示内容の理解と現代語訳をめざして続けています。

次は、集花書（早稲田リール番号「伝書051」（仮翻刻は以下にあり））を読んでいます。

参加ご希望の方は、藤田までお申し出いただければありがたいです。

三月は部会を開催しません。

二月三日に藤田氏から受け取った案内メールである。部会とは研究会を構成するプロジェクトの名称で、当時は講読とともに『羽衣』をテーマにした部会も開催されていた。追って二月五日に『集花書』ではなく『うたひ鏡』であるという訂正メールがあり、『うたひ鏡』プロジェクトはここから始まる。会場は校地奥の新研究棟八階に位置する藤田氏の研究室。校舎移転前で、阪急桂駅から国道九号線を西に進み、芸大前のバス停で降りて坂を上り、校門を通り過ぎ、ツツジの植え込みの中をゆるやかに上る石段を踏みながら向かったことを思い出す。

研究会はたいてい午後からだった。バスの到着時刻に合わせて昼頃から三々五々と人が集い、定時になると大抵

揃う。担当者が原文を音読し、次いで訳文を囲んで皆で検討するという流れで研究会は進行していった。担当者になるのは、各条の内容に研究領域が最も近い参加者である。ゆるい輪番でもあったので、年度を通じて多くのメンバーが担当を務めた。

解釈を巡って議論が生じることもあった。簡単に解決することもあったし、なかなか定まらないこともあった。よく本を囲んで知恵を絞った。広い研究室の左右の壁には作り置きの本棚があり、隙間なく本で埋められていた。テーブルの上にも本があふれ、ドアの隅の食器棚の隣には、無造作に謡本が積み重ねられていた。ドアを背にして右の壁の本棚には、民族音楽学や能謡関連書物・雑誌が収まり、奥には複写物やファイルが並んでいた。左には地拍子関連書籍のコレクションや貴重書、謡曲雑誌が揃っていた。『謡曲界』の束などが積み上げられ、『能の地拍子研究文献目録 単行本の部』で調査された書物が収められていた。

年度終わりまで幾度か講読会が開催された後、二〇一九年度が始まり、研究会は本格的にスタートした。

ゆっくりと訳しながら読んでいます。目標は、講読中の伝書の現代語訳の作成です。現代の技法から、あるいは国内外の音曲からの類推によって、よりふさわしい解釈を提案するというかたちで、読みすすめていきます。

二〇一九年五月十日のメールに記された趣旨説明である。『うたひ鏡』は文脈のはっきりしない複雑なテキストと見えた。過去の伝書の影響を強く受けているのは当然だが、自分の体験に基づく実践に関する記述も少なくなっている。また、思い出したように、過去の演奏実践や謡文化の慣習はこのような具合だったという回想も挟み込まれる。テーブルを囲んでソファや椅子に座り、声明、伝書、ふし、拍子、現代の演奏実践等々、参加者の知識を総動員して現代語訳に取り組んだ。

研究会は平穏に進んだ。瞬く間に一年が過ぎ、年末には『うたひ鏡』(上)を読了。来年度は続けて——中巻が欠けているので——『うたひ鏡』(下)と考えている矢先に、立て続けに吉凶大事件が発生した。中巻を含む『う

「たひ鏡」写本の発見と、新型コロナウイルスの流行である。

写本の発見は二〇二〇年二月だった。私が見つけたのだが、発見はまったくの偶然だった。近年図書館や文書館、博物館による資料の電子化が急速に進みつつあり、日頃から電子目録に親しむようにしているのだが、高知県立高知城歴史博物館の目録を眺めていた時に見出した。『宇多伊茂の』と題されたタイトルがあり、謡曲関連かもしれないと思ってアクセスして内容を調べると、なんだか見覚えがある。先日読んだ『うたひ鏡』に酷似する。しかし、はるかに丁数は多い。調べてみると『うたひ鏡』上中下の三巻揃であった。『宇多伊茂の』は、「謡曲」、「能楽」、「謡本」のキーワードでタイトル検索してもヒットしないので、研究者たちから見過ごされてきたのだろう。なお、その後判明したのだが、文庫は冊子体の蔵書目録も出版されていて（一九七二年刊）、件の書物も掲載されていた。

さっそく藤田氏に連絡すると、ぜひ全部読もうということになり、翻刻して世に出すことまで視野に入れた研究会を目指すことになった。『うたひ鏡』は全三十条。まず行ったのは翻刻作業の枠組み作りである。藤田さんが奔走され、田草川さんと恵阪さんが大変な作業を引き受けて下さることになった。

研究会の次年度継続の許可も下った。研究会を公的な研究活動の枠組みで進めることが可能になる。『言海』の執筆をテーマにした高山宏の『言葉の海へ』には、冒頭に伊藤博文が大槻文彦の直属の上司に対して労をねぎらう場面がある。謡曲伝書研究に予算を支出するというのは難儀な仕事であり、うかがい知ることのできない世界に感謝した。

凶事は新型コロナウイルスの流行である。二〇一九年の年明け早々頃はそれほど深刻に考えられていなかったが、船舶等での集団感染が報じられるに至って、社会は疫病に対する不安と恐怖に染められていった。マスクや消毒用アルコールが瞬く間に売り切れ、事態が新型コロナウイルス対策の特別措置法（三月）、緊急事態宣言（四月）に及ぶと、社会活動は急速に低下して、かろうじて維持される程度になってしまった。欧米の惨状が報じられるた

びに、明日は我が身とおびえる毎日だった。

停止した研究会は、しかしながら、五月ごろから動き始めた。希望の第一報を受け取ったのは、四月二十九日。研究会の在宅開催の決定を知らせるメールである。

日頃より研究会でお世話になっております。

当面の間、研究会を在宅で開催することがみとめられました。

次いで、早くも五月十五日に Google Meet の案内状を受け取り、テレビ会議システムを利用した研究会が開催された。初期の Google Meet の案内文である。

次の予定にご招待します。

タイトル…藤田プロジェクト（謡鏡）

日時…2020年5月15日（金）午後1…45～午後5…15 日本標準時

カレンダー…※※「メール受信者のメールアドレス」

参加者…※※「メンバーのメールアドレス」

体制が整うまでに、膨大な量の調整作業が続いたことが想像される。これまで全くこの種のシステムを扱ったことがなかったので、恐る恐るアプローチすることになったが、やってみると意外に簡単だった。慣れるのもそれほど時間がかからなかった。メンバーのだれもがそんな感じだったような気がする。講読会がテレビ会議システムと親和性が高かったからかもしれない。

Google Meet は慣れるとなかなか便利なものだった。特にそう思ったのは、移動である。比較的会場まで遠く、研究会の日はどうしても往復四時間程度余裕を見ておかなくてはならなかった。これが五分で済む。交通費もかからない。傘を忘れることもない。

もつとも、研究会を介しての本の貸借、終了後の雑談や情報交換、心尽くしの茶菓子（六月はしばしば水無月を

ご馳走になった)、調査や研究発表にメンバーが出かけた際のおすそわけといった楽しみは無くなった。終わった後の休憩や挨拶、名残惜し気に帰った時間も失われた。最初のうちはそのうち新型コロナウイルス禍も終息して再び昔のようになると思っていたが、年が経ち、テレビ会議システムが常態になるにつれて、徐々にオンライン研究会の身のこなしが当たり前のものとなり、いつしか昔のことは忘れていった。

講読会は、オンラインに移行したことを全く感じさせないほどスムーズに進んでいった。配布資料もメール添付で届くようになり、推敲できる時間が増えた。ただし、目指す方向は変化していった。研究・実践が入り交じり、さまざまな角度から謡曲にアプローチする混沌的な性格が失われて、謡曲研究に関する高度に専門的な内容が増加していった。卓越した文献学者の協力を得たことや、自宅待機のために研究する時間が増えたことや、さらに広く考えるならば、疫病の蔓延によって研究に強い切迫感が生まれたことが重なったためではないだろうか。当時、新型コロナウイルスは、下手をすれば死ぬかもしれない謎の病気と思われていた。

振り返ると、第二十条から二十五条までがその後の研究会を特徴づけたように感じられる。第二十条から第二十二条は高橋さんの担当で、翻刻と現代語訳に加えて「大意と注意点」、「資料」が付随した重厚なものだった。第二十三条から第二十五条は恵阪さんの担当で、エレガントな翻刻と過去の謡曲研究を踏まえた詳細な注釈に特徴づけられた仕事だった。他方私は限られた崩し字が読める程度であり、過去の能謡文献に関する該博な知識もない。大変なことになってきたと蒼くなった。

高度な文献知識を耳学問していたことが思い出される。また、場当たりに崩し字を覚えていった。テキスト読解も精緻になり、話についてゆくために密かに古典文法をひっくり返したり、古語辞典を頻繁に参照したりした。伝書の議論はひとまず措き、とにかく大急ぎで古典文法を確認した。ただ、確かに大変ではあったが言葉の勉強は面白く、新しい外国語の勉強を始めた学生の頃をほんやりと思い出した。

この時期、藤田氏の研究室では複数のプロジェクトが同時進行していた。研究会の案内がプロジェクトを横断す

ることもあった。また、控えめに研究会が広報されることもあり、参加メンバーはすこしずつ増えていった。コメントに新しい知見が加わり、研究会はよりいっそう豊かに進展していった。

なお、同じくこの時期から翻刻のガイドライン作成も始まった。中心となったのは長田さんで、最終的に凡例として結実することになる。

講読は順調にどんどん進んだ。ついていけなくなるのではないだろうかと心配した研究の高度化・専門化は、徐々に落ちついていった。自ずとメンバーたちは、それぞれ専門とする領域に引き付けて、『うたひ鏡』を論じるようになっていった。

二〇二一年五月から研究会は三年目に入った。あいかわらず新型コロナウイルスの蔓延は続き、社会活動は低調ではあったが、研究会は着実に進んでいった。高知本に欠落があり、内容も長くて難しい末尾の第二十八条、第二十九条、第三十条——一調二機三声の法、文字訛り・文字送りの事、十二調子聞き分くる図——も各個撃破し、秋にはとうとう下巻の末尾に到達した。

上中下三巻のうち、最後に残ったのは中巻であった。第九条に戻って、順に読み進めていった。中巻は書写本であると同時に孤本なので、与えられたテキストを様々な方向から検討して解釈する以外に道はない。翻刻や解釈を巡って議論が繰り返された。第十七条と第十九条を担当させていたのだが、全体を通じて中巻はとらえどころがなかった。上巻に比して文章が荒く、段落構成が甘い。草稿のようにさえ見える。文体が途中で急に変化するところもある。覚書をまとめて書物しようとしたが、十分に推敲する時間がなかったのかもしれない。

中巻を読み始めて皆の間に湧きおこってきたのは、原本を参照したいという希望である。ページの綴じ目に隠れた部分（おそらく綴じ目を強く開くと破損の可能性があったのだろう。しばしば十分に本を開けずにマイクロフィルム撮影が行われていた）、朱筆の可能性のある箇所、筆の運びの確認などは、マイクロフィルムによる複写資料では、どうすることもできない。そして、読めない部分が本文の翻刻・解釈において重要な役割を果たすように推

察されることもしばしばあった。

年が変わり、二〇二二年に『うたひ鏡』を所蔵する高知県立高知城歴史博物館に閲覧・複写を申請すると快く許可が下り、二月二十七日から、三月一日にかけて現地調査に赴くことになった。

出かけたのは翻刻・現代語訳にたずさわっているメンバーである。新型コロナウイルスの蔓延が収束しないことを考慮すれば少数精鋭で赴くという選択肢もあったが、重鎮、中堅、若手研究者が揃って出かけることを通じて資料調査法の伝授を行うという側面が考慮されたのではないだろうか。オンライン開催によって柔軟な予算の執行が可能になったという側面もあっただろう。

博物館での作業はスムーズに進んだ。学芸員の方が周到に準備してくださり、一室で『うたひ鏡』を中心に能謡関連資料を閲覧・複写した。中心となったのは、翻刻責任者たちである。朱筆による書き込みがないことがわかり、綴じ目に隠れた部分の状況が判明し、『うたひ鏡』の旧蔵者に関する情報もいくらか判明した。

無事に年度末を迎え、二〇二一年度を締めくくる案内メールで告げられた今後の方針である。

この音曲技法書の研究会は、今年度をもって、いったん解散したいと思っています。うたひ鏡の輪読（および現代語訳、解説の作成）は、二〇二二年度もつづけて行きたいと思っています。音曲伝書を丁寧（かつ、大胆に）現代語訳するという作業は、現代の技法との連続性や違いがよくみえてくる、なかなか面白い作業です。一部分、担当してみたいと言う方はおられませんか？

組織改編して現代語訳を中心に進めていく予定が記されている。「丁寧」と「大胆」の言葉から研究会の方向性が打ち出され、高度な専門的な研究でありながら柔軟な発想を併せ持つという高邁な目標が見て取れる。また、よりいっそう広く研究者の参加を期待していることもうかがえる。

二〇二二年度は、第十三条、第十四条から始まった。メンバーは次のとおりである。

上野正章（本学客員研究員）、恵阪悟（帝塚山大学）、鎌田紗弓（東京文化財研究所）、近藤静乃（東京

藝術大学)、柴佳世乃(千葉大学)、高橋葉子(本学客員研究員)、田草川みずき(千葉大学)、長田あかね(神戸女子大学)、丹羽幸江(本学客員研究員)、坂東愛子(本学共同研究員)、吉岡倫裕(本学共同研究員)

新型コロナウイルスは一向に収束する気配を見せず、加えてロシアとウクライナの戦闘が始まり連日戦況が報じられる二〇二二年だったが、研究会は粘り強く続いていった。中巻が終わり、次いで試みられたのが既訳・翻刻済の上巻の再検討である。上巻には「解説」が無い。見直すと翻刻や現代語訳にも瑕疵が見いだされる。新たに解説が書き加えられ全面的にリライトがほどこされた。研究の進展を如実に感ずることができた一方、上巻は謡曲実践・理論に関して基礎的な項目を取り扱った章が多いので、作業は困難を極めた。

二〇二三年度を以て講読終了。二〇二四年度から出版への準備が始まり、記録的な猛暑の中、九月三十日にすべての原稿が出揃った。

研究期間は六余年。十年ひと昔と云われるが、小学校の在学期間に等しい。多くの人々にお世話になり、幸運にも恵まれ、次々に襲ってくる大難の中で大プロジェクトを完成させることができた。感謝したい。

最後に、本書の出版にあたり、田中プリントの山形将章氏には、たいへんお世話になった。感謝したい。神戸女子大学大学院生の荒野愛子氏には校正の労をお願いした。たいへん助かった。また、高知県立高知城歴史博物館には、本書の原本の閲覧で、大変な便宜を図っていただいた。加えてこの出版にあたっては、高知本を底本として使用することに関して、寛大なお許しをいただくことができた。感謝申し上げます。

(上野正章)